

特集 50号の発行によせて

50号に感謝

住職 中山英昭

創刊号が発行されて以来今回号で節目の50号を出すこととなりました。編集委員の皆様、門信徒の皆様、有縁の皆様衷心よりお礼申し上げます。思えば17年前初代編集長ともいふべき玉田忠さん宅に参拝した折りに雑談の中で「寺の新聞を出してみたい」と話したのがきっかけでした。一流企業で社長をされていた方だけに、その後の動きが速かったことを記憶しております。一週間ほどで壮年会員、婦人会会員をたちまちに15人程集められ、第1回目の編集委員会が持たれました。

瞬く間に第1号の寺の新聞の発行となりました。「つつじ寺だより」と言う新聞名は境内地に大正期に出来たつつじの庭木が沢山あることから編集委員の総意で決められました。

文字ばかりでは読みあきるだろうと写真を沢山入れたのは良いのですが、当時業者のカラーコピー機を借り印刷したので、たちまちに紙が張り付き、

3台あったコピー機を故障させてしまったりと苦労の連続でした。

でも編集委員の皆さんが真剣に向き合い熱心に議論し、より良いものを作ろうという強い熱意を感じ、ありがたい思いでした。

壮年会・婦人会のサークル活動もその当時次々と生まれ、



境内のつつじ

ご愛読ありがとうございます。各方面から、代表の方々に感謝をいただきました。

研修旅行やイベント（コンサートや講演会、記念講演会等）も実施され、『つつじ寺だより』の紙面を飾ることができました。今思えばよく次々と色々なことをやってきたものと各号を見ていきますと、われながら感心します。お陰様という言葉しか出てきません。一人ではできなくても、多くの方々が一緒になって作り出すことで素晴らしいものになることを知らされました。

住職・寺で発行している新聞は多いと思います。門徒さんが中心の寺の新聞は少ないと思います。編集内容に毎回苦勞しておりますが、多くの皆様のご意見をもとに、より良い『つつじ寺だより』を送り出したいと思っております。どうぞ皆様のご意見、ご感想をどんなことでも結構です。で、私どもにお寄せ下さい。

たかが50号、されど50号

総代長 栗原政廣

『つつじ寺だより』が50号の発行という大きな節目を迎えました。年3回の発行ですので今年で17年目になるわけです。創刊当時はまだパソコンも普及し始めて間もない頃ですので紙面作りをはじめ様々な苦勞があったことと思います。中でも創刊号の数部部をカラー印刷するためにコピー機と格闘されたことなどを時々笑い話としてお聞きしますが、その時の寺報編集責任者であった玉田さんをはじめ編集委員の皆様には頭の下がる思いです。

新たなことを立ち上げ、その基盤を作り上げてレベルを敷くことの大変さや重要性を思うと創刊当時から関わってこられた編集委員の皆様には並々ならぬご苦勞があったことと思われます。そのお陰で今回の50号までたどり着けたわけです。



創刊号編集会議

私が編集委員の一員として携わったのは17年前の17号からでした。その時、編集委員の皆さんから「読みやすく多くの方々に読んでいただける寺だよりを基本に編集していきます」とお話がありました。読んでいただけるものでなければ発行する意味もありません。このことを念頭に置き、より良い寺だよりの作成に向け編集会議に臨んでいきます。

時々ご住職から読者の方よりお寄せいただいた寺だよりの感想を読ませていただきます。その度に親しみやすく読みやすい寺だよりにしていかなくてはと思つていて次第です。今後も忌憚のないご意見やご感想を是非お寄せ下さい。

この寺だよりではご住職の巻頭文をはじめ、当寺の各種行事の実施報告や活動の様子、シリーズ物等を掲載していますが、情報発信としての機能を十分に生かせるよう工夫していければと考えています。

これからも寺報編集責任者の橋本勝さんのもと、チーム一丸となって更に内容を充実させ、皆様から親しまれる寺だよりの作成に取り組みでいきます。



『つつじ寺だより』 50号発行によせて

西蓮寺住職 艸香雄道
くさか ゆうどう

この度、弘教寺様『つつじ寺だより』50号発行に際し、謹んでお祝い申し上げます。

私共にも毎号をお送りいただき、毎回楽しみに拝見しております。

ご住職のご法話からはじまり、お寺の行事報告や参加者の感想、サークル活動やご門徒の紹介と、弘教寺様の活動が生き生きと伝わって参ります。

私は、弘教寺様には長い間お育てをいただいております。20年ほど前になりましたが、布教使となり初めて婦人会の例会に伺いました。まだお取り次ぎもままならぬ私でしたが、婦人会の皆さまは緊張していた私を優しく受け入れ、温かい雰囲気の中でお話することが出来ました。今もご法要のお取り次ぎ、仏教壮年会の例会とご縁をいただいておりますが、その雰囲気は変わりありません。

壮年会では、現在『歎異抄』を拝読しております。例会では、お念仏を称え、壮年会歌を唱和する声がお堂に響きます。お一人ひとりがお寺を心のより所にされていることを、強く感じる瞬間です。その声は、念仏のみ教えに遇われた喜びに満ちる声です。

「不要不急」と言われる昨今、「あなたにとって、大切なこと(要)は何か、急がねばならないことは何なのか。」が問われています。実は、問われているのは「要」と「急」の中身ではないでしょうか。このコロナ禍を通じて、「生きる」ことの意味合いを見つめざるを得ません。

「真実なる信仰は、人に生きる意味と方向を示してくれる」と伺いました。この『つつじ寺だより』が、ご門徒皆さまに灯台の灯りの如く、生きる指針を示して下さいます。

弘教寺様が地域に開かれた念仏の道場として、今後ますます発展することを念じています。合掌

お念仏に生かされて

安村文子



弘教寺様には、覺法寺婦人会を通してご縁をいただき、大変お世話になっております。

『つつじ寺だより』もいつも楽しく読ませていただいております。

年間行事に数々参加させていただいた中で、「子どものつどい」ではスタッフの一員としてヨーヨー釣りのお手伝いをさせていただきました。境内は模擬店がいっぱい

で子供達の溢れる笑顔で大賑わいでした。そうめん流し、スイカ割り、気分は最高です。和気あいあい、皆様と楽しく過ごした一日、心地良くて、まるで自分のお寺にいるようでした。また参拝し、お手伝いできたらなと思っております。

ご住職様が43号で、東井義雄先生の詩集「老い」をご紹介されました。私は今その心境です。体調を崩してから、なぜ前の体に戻らないのだろうとふさぎ込んでおりました。ところが、この現実を受けとめようと思ったりとき、何をするにも「南無阿弥陀仏」を心に思ったりつぶやいたりしている自分に気づきました。「ナンマンダブツ」が、いつも心の中にあって、一緒に喜び悲しんでくれている、心の支え安らぎになって、有難く思っているのです。今、いただくいのちに感謝の心でお念仏を申す日々です。

コロナ禍の下、50号の発行にご尽力くださる編集委員の皆様、本当に有難うございます。これからも楽しみにしております。合掌

弘教寺さんとの出会い

新木壽一

奥様と境地区子育て支援の会で一緒に過ごしたのがご縁で、弘教寺さんの各種行事に参加させて頂くようになりました。

行事の時の役員さん初め皆様が主体的に生き生きと活動している姿に、弘教寺さんの実践に興味を持ちました。ご住職さんとお話する機会があり、緊張している私を笑顔で迎えて下さり、自然に会話も弾みました。「死後よりも現世の生き方が大事です。そのために出来ることを実践することが私の務めです」という話をして下さいました。

後に、『つつじ寺だより』第48号の、住職さんの「今日を生きて」の話に繋がりました。

弘教寺さんは、行事や『つつじ寺だより』



を通して、皆様の「今を生きる」を実践し、心の拠り所になっている、と強く感じました。
また、『つつじ寺だより』を毎月送って頂き、私自身の生き方を見つめ直す機会にもなっています。これからも『つつじ寺だより』を楽しみに待っています。

つつじ寺だよりとの巡り逢い

柴崎一弘

『つつじ寺だより』50号発行おめでとうございませう。私が同たよりを知ったのは10年余り前に壮年会に入会があつてからです。

退職してボケーとしていた頃「仏教」についてもっと知りたいと考えていました。そんな時、弘教寺仏教壮年会に入会すれば学ぶことができると、友人から教えてもらいました。



さっそく、同年には「中央仏教学院」（西本願寺）の通信課程に入学、親鸞聖人の法要に参拝。また、連続研修会（群馬組）にも参加させてもらいました。

一方、寺の例会、研修旅行等が続ける中で多くの人と知りあい、つながりを持つことができ、多くの事を学ぶことができました。

そうした中で『つつじ寺だより』を愛読するようになりました。同たよりは「仏教・心」について学ぶだけでなく、弘教寺の行事、社会で話題となっている最新情報の提供があり、今では楽しみの一つとなっております。

最期に編集はなにかと大変かと思いましたが、これからも毎号を楽しみにさせていただきます。と思っています。

毎号を楽しみに

福永君代

発行50号おめでとうございませう。創刊号から50号、凄いです！
改めて創刊号から49号まで拝読してみると、17年間の様々な出来事が走馬灯のように浮かんできました。また、大悟さん、真悟さんの成長にも感激です。

私が婦人会会長になって間もなくのこと、仏教婦人会の例会の折り、高崎市上大類病院の若宮苑への法話会でフラダンスを踊つてはと、お話が出ました。全くの初心者も動員したチーム、借り物の衣装で、たった2回の練習では不安な思いでしたが、前会長の野水さんの指導の下、皆さんと心一つになって頑張る、若宮苑の入所者の皆様に感動して頂けたことが、今でも忘れられません。その後、ビハーラ活動の一環としてコーラスやカラオケなどのサークルも若宮苑の皆様に喜んで頂いている事が、折々に寺報で紹介されてきました。こうして振り返られるのも編集委員の皆様の努力のおかげと思いつつ、毎号楽しみに拝読しています。

これからも、『つつじ寺だより』がますます発展し、皆さまの心にとどくような、たよりになることを願っております。

合掌



心の定期便

壮年会会長 根岸定明

10月上旬、『つつじ寺だより』第50号発行の連絡をいただきました。筆不精の私は、何をどう文書につづれば良いのか頭を悩ませました。

手元に綴ってある寺だよりは、平成22年7月発行の(第16号)からでした。その紙面から、「弘教寺を支えた歴代住職方」と題した、ご住職の投稿が目に入りました。そして、記事を読み進めていくうちに、開山以来160余年の歴史を新たに認識いたしました。また当時、中山莞爾前住職のお話をしていた亡き父を思い、胸を熱くしました。

各ページから多くの人の出会い、寺での行事を通して、人との触れ合いを感じます。寺だよりはまさに、心の定期便です。

平成17年8月の創刊号発刊から今日まで、長きにわたりご尽力を賜わった皆様にご礼を申し上げます。感想とさせていただきます。

寺と門信徒の歴史

婦人会会長 泉 昌子

『つつじ寺だより』50号発行おめでとうございます。創刊号でご住職様が「寺だよりで、仏さまのみ教えや寺での活動、行事などを門



信徒の皆様にお伝えすることにより、弘教寺をより身近な寺として感じていただければ有難い」と書かれていたように、弘教寺は、私にとつてとても身近な寺です。

これまで、仏教婦人会では、住職様や県内の布教使の方々のご法話を聴聞させていただいてきました。サークル活動では、練習が終わると感謝の気持ちを阿弥陀さまにお伝えして帰路につきます。そんな時、心に感じる安らぎは年齢が増すごとに膨らんでいきます。

48号でご住職様が、「正信偈」の書写をご紹介くださいました。以前より希望していたことが現実になりました。49号では坊守様が、「うづき会」としてご紹介くださいました。

中でも、私にとつて特別なプレゼントとさせていただきますのが、大悟様のご講話です。実に丁寧で分かるまでご指導くださいます。私は、大悟様が大人になられたお姿を亡き主人に伝える時、とつても幸せに思います。

『つつじ寺だより』は、弘教寺と門信徒の歴史です。ご住職様、役員様、編集委員の方々のご尽力のたまものです。心より感謝申し上げます。今後ともよろしくお願いいたします。

合掌



つつじ寺だよりと私

橋本勝

寺の新聞とは平成17(2005)年の春に、編集責任者、玉田さんからの相談が始まりました。当時、私のパソコン技能はエクセル(会社はエクセルのみ)で報告書の作成が、女子社員の手助けで出来る程度です。新聞の編集を相談された時、ワードの知識がない私には「エクセルの縦書き」としか返事が出来なかつたです。

創刊号は作ることに徹し、原稿はエクセルで作成の文書と写真のコピーを切り貼する。これをスリーパーのコピー機で苦闘しての発刊でした。

第2号以降は、市役所情報センターのパソコン教室を受講し、エクセルの技能向上しての編集に務め、発行を重ねる毎に編集作業も上達しました。しかし、エクセルは文書作成には不向きで、文書の追加・変更には苦勞をします。だが、私にとつて原稿を読み一字一字を確認し入力する編集作業は、浄土真宗のみ教えをいただくことになり、自身のパソコン技能の向上とともに有難いことと喜んでおります。

第13号からは、編集委員の紹介で「編集長ソフト」をご住職に購入いただき、エクセルでの編集に比べて文書の追加・変更が容易となり、楽しく編集をさせていただいております。

一方のコピー作業は、知合いの印刷業者のコピー機での印刷でしたが、ご住職が他の印刷専用業者を捜されて、パソコンの新聞データを業者に直接メールして印刷ができております。

『つつじ寺だより』は、寺内外の関係者のご協力で継続ができ、有難いことと感謝をしています。これからも皆様にご協力をいただき、寄り添えるような新聞に心がけたいと思っております。